

Kumamoto University

## 新型コロナウイルスに関連する研究も進展 総合力を発揮して産学連携を推進

—熊本大学には、注目される研究が数多くあります。新型コロナウイルスに関する研究も進んでいるそうですね。

**小川** 昨年、ヒトレトロウイルス学共同研究センター熊本大学キャンパスの研究グループが、新型コロナウイルス感染症で、重症後に急速に回復した症例から、強力な中和モノクローナル抗体を分離することに成功しました。この抗体は、ウイルス表面の突起物に結合して細胞へのウイルス侵入を妨害することで、感染の予防効果や重症化の抑制効果が期待できるものです。また、熊本大学大学院生命科学研究部のグループは、血液や尿を利用した、新型コロナウイルスの測定技術を開発しました。PCR法とは原理が異なる方法で、感染の有無や重症化率の予後予測が可能となる新技術です。現在、特許出願中です。こうした研究は、いくら着想が良くても、基礎がないと成り立ちません。地道な基礎研究の成果だと考えます。

—コロナ禍にあつて、世界が注目する研究でしょうね。コロナ以外のことも、トピックがあれば教えてください。

**小川** 医学に関する話題ではありませんが、熊本大学が富山大学と開設した先進軽金属材料国

際研究機構が、今年4月から文部科学省の共同利用共同研究拠点に認定されることが決まりました。共同利用・共同研究拠点は、大学の附置研究所や施設のうち、大学の枠を越えて全国の研究者が共同利用できる拠点です。その分野で世界に伍するトップレベルの施設が選ばれています。熊本大学では、基礎医学の研究で知られる発生医学研究所に続いて選ばれた2つ目の拠点となります。大変誇らしく思っています。

—地元をはじめとする企業との産学連携についてはどうですか？

**小川** 私が特に力を入れているのが産学連携です。すでにKMバイオロジクスや再春館製薬所などの地元企業をはじめ、さまざまな企業との産学連携を進めています。1ミリリットルの血液に含まれるわずかながん細胞を検出できる装置・マイクロフィラタデバイスの開発も、本学の医学系や工学系の研究者と地元企業との共同研究により実現しています。医学だけでなく、薬学、工学、理学など、総合的な力がないと世界に太刀打ちできません。分野の垣根を越えて研究を進めることが大切だと考えています。

## 熊本大学病院の再開発整備が終了 時計台を使いライトアップで啓発



大学病院正門近くの時計台  
疾病啓発のライトアップを行っている

ます。併せて、駐車場スペースを拡大するなど、患者さんのアクセスを向上させています。

—正門近くの時計台が目を引きます。

**馬場** 時計台は、疾病啓発にも利用しています。疾患ごとに決められた色に合わせて、例えばピククリボン月間ならピンクに、世界糖尿病デーならブルーにという具合に、時計台をさまざまな色彩でライトアップして啓発に役立てています。

—設備やソフト面についての構想はありますか？

**馬場** 病院の入り口に設置している非接触体温計は、顔認証の機能を持たせることもできます。そこで、来院の時点で患者さんの顔認証をして、再来手続きが自動で完了するシステムを導入したいと考えています。また、大学病院には、血液サンプルや染色標本、検査で使った画像など、さまざまな生体材料があります。これらをストックするバイオバンクの設立を計画しています。産学官にオープンにすることで、広く生体材料を活用し、新しい医学や医療の発展に役立てます。コロナで人びとの気持ちがあがりましたが、その間に進歩した技術を積極的に取り入れ、将来に向けて、病院の診療機能や研究開発に活かしていきたいと考えています。

## 次代の医療に不可欠な働き方改革 先進技術導入や人材の育成と共に

—医師の働き方改革が求められています。現状や今後の展開についてどうお考えですか？

**馬場** 医療ニーズの変化や医療の高度化が進むなか、医師個人の負担はさらに増加していくと予想されます。持続可能な医療提供体制を維持していくために医師の働き方改革は必要です。その

アプローチの意味もあり、2024年、熊本大学病院の医療情報システムを入れ替えます。スマートフォンなどの端末を使って、医師が院内のどこからでも電子カルテなどの情報を見られるようにします。病棟以外の場所からでも、カルテを見て、オーダーを出せるようになるわけです。近い将来には、院外からでもアクセスできるようにしたいと考えています。特に病院から離れた場所に

住む医師などは働きやすくなります。高度なセキュリティが必須ですが、しっかりと取り組みたい。働き方改革を進ませられます。

—テクノロジを使うことで、医療サービスの質を維持しながら、本来ならば両立が難しい働き方改革を進めていくわけですね。

**福田** 働き方改革の方向性は間違っていない。働き方が改善されて、医療関係者が働きやすくなった部分はたくさんあります。しかしながら、医師は人の命を預かる仕事です。現場の実情と離れたところで改革が進むようでは困惑します。大切なのは、人材育成と並行して、改革を進めていくことです。働き方の悪いところは改善しながら、医療に支障を来さない工夫をしていくこと

が必要です。

—医師不足の問題とも関係してくるということですね。そうした背景もあると思います。熊本大学医学部では、新たな入試枠を設けるそうですね。

**小川** これまで本学医学部医学科の入試では、卒業後の一定期間、知事が指定する地域で勤務することを条件にした地域枠を導入してきました。今回、その枠を増員するとともに、出

## 熊大外科学講座開講百年の節目に 日本外科学会定期学術集会を開催

—本年は、熊本大学の外科学講座開講100年に当たるそうですね。

**馬場** 1922年に熊本大学の第一外科が開講しました。その後、第一外科、第二外科の体制となり、さらに2005年からは、臓器別の診療体制に変わりました。今年が開講100年の節目ということで、第122回の日本外科学会定期学術集会を熊本県で初めて開かせていただくことになりました。昨年の参加者数は約1万7000人で、一昨年は約2万人が参加した大規模な学術集会です。今年の会期は4月14日から16日までを予定しています。

—4月14日と16日という2、6年前に熊本

願志願者を熊本県内の高校に在学中の方、または熊本県外の高校に在学中で保護者が3年以上継続して熊本県内に在住している方を対象に、国内外の医学研究・医療を牽引する人材を輩出することを目的とした熊本みらい医療枠を導入します。本学では、研究と臨床の両方が大切です。そのバランスを重視しながら、今後、志のある優れた人材を求めていきます。

地震が発生した日ですね。

**馬場** そうなんです。たまたま熊本地震が起きた日と学術集会の開催日が重なることになったのですが、だからこそ私としては、熊本開催に強くこだわり、誘致を進めました。ぜひ、全国から皆さんにお越しいただき、熊本地震から立ち直り、未来へと発展する街の姿を目の当たりにしていただきたい。併せて、熊本の地に息づく100年という外科の歴史の重みを感じていただきたいと願っています。

—新年らしい明るい話題ですね。ぜひ、成功させていただきたい。

## シンボル五高記念館の復旧を機に 熊本と熊大の魅力や情報を発信!

—さあ、新しい年が始まりました。2022年の抱負をお聞かせください。

**小川** 本学のシンボルの一つに、五高記念館があります。熊本大学の前身である旧制第五高等学校の歴史を伝える殿堂です。熊本地震で被災し、長く休館していました。昨年末に復旧しました。本学の魅力や情報を発信する上で大きな力になると期待しています。今後の新しい核となる取り組みも計画しています。世界大手の半導体メーカーがソニーとの共同で熊本県に半導体工場をつくりたい。これに合わせ、本学では大学院先端科学研究部の附属センターとして、半導体研究教育センター(仮称)を設置予定です。また、データサイエンスにも力を入れます。業界の第一人者とされる実力者を招き、データサイエンスに関する組織の設置も計画しています。昨年、本学のキャッチフレーズをつくりました。「常に情報を発信し続ける大学」、「常に外から見える大学」、「常に外からの声に耳を傾け、発展し続ける大学」の3つです。今年はその動きを加速したい。3つの目標を実現するため、全力で取り組んでまいります。

**馬場** 熊本大学病院は県内唯一の特定機能病院です。本年も地域医療の最後の砦として、役割をしっかりと果たしてまいります。同時に大学病院には、若い医師を育てる役割があります。教育にも力を注ぎます。研究にも取り組みます。病院で一定の研究費を確保した上で、これまで以上に注力したいと考えています。個人的には、4月に開く学会に向けて準備を進めます。医学のためにも、熊本のためにもなるような学会にしたいと、心に期しています。

**福田** コロナの経験で学んだことが、医療の世界にもあります。医療は単なる医学の科学的実践ではありません。国民や市民を巻き込んでいかないといけない。例えば、コロナのワクチン接種で副反応が強くなりましたが、多くの方が学習もしました。ワクチンは副反応もあるけれど、今回、



熊本大学五高記念館  
旧制第五高等学校の校舎  
明治22年(1889)竣工で国指定重要文化財

接種が進んだことで、医療崩壊を止められたということ。これは、子宮けいがんのワクチン接種を考える上で、とても良いことでした。日本では、ワクチンを嫌う方たちの反対もあり、世界でガラパゴス化するように接種対象者の接種率が大きく減少し、子宮けいがんの患者が増えています。このほど厚生労働省の専門家は、子宮けいがんワクチンの積極的な接種の呼びかけを再開することを決めました。コロナワクチンとの直接的な関連は分かりませんが、背景にはワクチンに対する国民意識の変化があるように思います。こういう学びを大切にしたい。学びや気づきから生まれる知恵を集めて、社会としてクリエイティブな何かにつなげていけたらと思います。

—2022年、新型コロナウイルスが早く収束することを願うとともに、皆様のますますのご活躍を祈念いたします。ありがとうございます。

※2部18面へ新春鼎談企画は続きます。併せてお読み下さい。



熊本県医師会  
ふくだ しげる  
福田 稔 会長

久留米大学医学部卒。熊本大学大学院医学研究科修了。国立熊本病院勤務を経て、1981年、福田病院院長就任。2004年～2010年、熊本県医師会会長。2010年から熊本県医師会会長を務める。専門は産婦人科全般、周産期。